

朗読劇短編集

作

石川ふみ

犬たちの明日

灯台の雪割草

雪山ガールズ

水槽列車

ホワイトクリスマス

「犬たちの明日」

登場人物

ピコ 小型犬 12歳

アキ 大型犬 10歳

ピコ あああ、まんぷく

アキ そうだな

ピコ もう、おなかすいたまま死んじゃうかと思った

アキ そのときは俺がなんとかしようと思ってたよ

ピコ うそお。だったらもっと早くになんとかして貰えばよかった

アキ 最後の手段だからな

ピコ やだ、あたしってば、じいちゃんいなくなっちゃって悲しいのに、食べ物のことばかり

アキ そんなことないよ

ピコ だけど、じいちゃんのご飯もう食べられないんだね

アキ 仕方ないよ。じいちゃん、天国行ってしまったんだから

ピコ じいちゃん、お前たちより先には死なないよ、って言ってたのに

アキ 俺たちも人間で言えばじいさんと同じくらいのトシだからな

ピコ　こんなかりかりのドッグフード。ちよっときつかったわね

アキ　おいしいおいしいって食べたくせに（笑う）

ピコ　保健所ってどんなところなんだろう。いつもこんなかりかりドッグフードなのかな

アキ　さあ。今日はここに取り残されていた俺たちへの緊急措置だったからな

ピコ　きんきゆう？　よくわかんない。明日迎えに来るって

アキ　この家にはもういられないしな

窓の木枠を風が鳴らす

ピコ　そうだ、アキ。足のマッサージしてあげる

アキ　ああ、悪いな

ピコ　どれどれ、どんな具合かな？

アキ　いつもありがとな、ピコ

ピコ　アキにはいつまでも元気に歩ける立派な大型犬でいてもらわないと困るもんね

アキ　俺は歩けなくはないよ

ピコ　アキがこの家に来たばかりの頃、あたしはこの家は全部自分のものだって思ってたから、アキはどうしてあたしのじいちゃんのお膝の上取っちゃうの？　ってすごく怒ってた

アキ　小さい犬がやたら俺に突っかかって来て、困ったな

ピコ　アキが背中差し出してきて、じいちゃんの抱っこより楽しいってわかってからだね、アキと仲良く

なつたのって

アキ 自分の欲望にまっすぐなところ、あの頃から変わらないな

ピコ いやあね、それって褒めてる？　ねえ、褒めてる？

アキ 褒めてるよ

ピコ ふたりでじいちゃんの周り走って、じいちゃん目が回るって言って笑ってたね

アキ あれはピコに合わせてたんだぞ

ピコ 知ってるよ。だけど、アキはまだ子犬で、あたしとしては遊んであげたつもりだった

アキ お互いに遊んであげてるつもりだった

ピコ もう、あんな風に走るのはあたしも無理だな。はい、

今日のマッサージおしまい

アキ ピコが世話焼いてくれてきたこと、感謝してるよ

ピコ やだ、改まって

アキ 明日、迎えが来る前に、俺は、この家を出る

窓の外、風が吹いている

ピコ アキ？

アキ うん。町の向こうの山に行く

ピコ 山って、何

アキ　じいさんとよく公園に散歩に行っただろ？

ピコ　うん。あたしあの公園の噴水好きだったよ

アキ　よく吠える柴犬がいたろ？

ピコ　いたいた。あの犬、きつとあたしのこと好きだったんだよ。あたしは、いつも無視してたけどね

アキ　あの柴犬が言ってたんだ。向こうの山では犬たちが自由に生きているって

ピコ　あたしは聞いてないけど？

アキ　いつも無視してたんだらう

ピコ　そんな……そうだけど

アキ　あの柴犬の話してたこと、気になってたんだ。山の中で、狩りをして、自分のちからで生きていくんだって

ピコ　人間と一緒に暮らすんじゃないの？

アキ　人間はじいさんだけでいいよ

ピコ　え。だって。それじゃあ、食べ物とかどうするの

アキ　ふふ(笑う)。さて、どうするかなあ。俺だって、初めてのチャレンジだからわからないけどさ。でも、やってみたいんだ

ピコ　そんな。あしたはどうすればいいの。明日、アキと一緒に保健所っていうところに行くんだとばっかり……

アキ　ピコはお迎えの人を待てばいい

ピコ アキと一緒にじゃないんだ

アキ 俺とはここでお別れだ

ピコ いやだよ。あたしたちはさ、年をとっても人間とうまくやって、おいしいものもらってさ、調子が悪ければお医者に連れて行かれて、それはちよっと嫌だけど。でも、そうやって生きていくものじゃないの？

アキ ずっと夢見てたんだ

ピコ 夢……？

アキ そう。犬だって、夢は見るんだな。今までの、じいさんとピコとの毎日が嫌だったわけじゃない。でも、自由になってみたかった

ピコ やだ。どうやって行くの。ドアは保健所の人が閉めて行ったでしょ。あ、明日保健所の人が来た時？

ちゃんとお別れして行くの？

アキ 俺たち、ここに何年住んでたと思ってるんだよ。言っただろ？ いざとなったらなんとかする、最後の手段はあるって

木窓にアキが体当たりをする

アキ この窓は壊れかかってる。俺の全体重をかければ外に出られる

ピコ アキ…… 待って。あたしも行く

アキ だ・か・ら。ピコには無理でしょ

ピコ どうして

アキ 優しい人間が食べ物くれる暮らしじゃないんだよ。寒い時には暖房をつけてくれる人間もいないんだよ。ピコには無理だ

ピコ 決めつけないでよ

アキ わかってくれよ

ピコ アキにはあたしが必要

アキ 悪いけど、俺はピコとは違う道を選んだんだ

ピコ その足でどうすんのよ

アキ 俺の足。年をとってちから強く駆けることはできなくなった足。だから今が最後のチャンスなんだ。自由にさせてくれよ

ピコ あたしも同じよ

アキ ピコ？

ピコ あたしだって、初めて会う人に尻尾振っても、貰えるのはかりかりのドッグフードかもしれない。あたしが寒がりだって知らないかもしれない。暖房だけじゃなくてアキの体温が必要だって知らないかも……知らないに決まってるじゃない！

アキ ピコ、わかったよ

ピコ わかった？ 山、登るんでしょ？ アキの足をマッサージしてあげる。これからもあたしはアキのお姉さんだから

木窓、
倒れる
音楽

終

「灯台の雪割草」

登場人物

奈津子

勇作

カモメの鳴き声

穏やかな波の音

奈津子 あ、あった。ピンクの雪割草。ほんとに崖っぷちにしか咲いてないんだ。ちょっと怖いけど、あと

一步……

勇作 何をしている！

奈津子 きゃあ。なんですか、おじいさん

勇作 早まるでない。生きてさえいれれば思いがけず良いことも起きるものだ

奈津子 え。あ、いやだ。もしかして、わたし、海に飛び込むように見えませんか

カモメの鳴き声

勇作 ……違うのか

奈津子 違いますよお。占いで、言われたんです。東のほう、高いところに咲いたピンクの花を『と』って身に着けていたら幸せになれるって

勇作 取る！ ここは自然保護地区だぞ。草花を抜くなんてもってのほか

奈津子 それも違います。写真に撮るんです。身に着けるっていうのは、たぶん携帯の待ち受け画面にするっていう意味で

勇作 ……写真か。なら、よろしい。足を踏み外さんように

波が岩に当たり砕ける音

奈津子 あれ？ いや。んー。やっぱり、身に着けるって、そういうこと？

勇作 あん？

奈津子 あの、一本だけもらうわけには……

勇作 駄目だ

奈津子 ふう。わたしの幸せはまだ遠いのか

勇作 仕方ない。その灯台の敷地内の雪割草なら分けてやってもいいぞ

奈津子 ほんとですか

勇作 花の色は白だけだな

奈津子 えー

カモメたちの鳴き声

終

「雪山ガールズ」

登場人物

愛美 大学生、山岳部

晴香 大学生、山岳部

吹雪の風の音、山鳴り

愛美 いやだ。ほんとにこんな雪の中に閉じこもってて助かるんですか、私達

晴香 愛美、部長からちゃんと教わったでしょう。雪山で遭難した時はシェルター作って、あとは無駄に動

き回らず……

愛美 晴香先輩。わかってます。でも

晴香 ごめんね。私となんかで

愛美 え？

晴香 愛美は、部長とだったらよかったって思っているんでしょう

愛美 そ、それは。……すみません。はい。

だって、このまま死んじゃうかもしれないですよ。そんな時に一緒に

晴香 変人の私とじゃいやだよ

愛美 いや、そうは言ってませんけど

晴香 いいの。でも、私、愛美のこと、絶対死なせたりしないから安心して

愛美 晴香先輩……

遠く、雪崩

愛美 やっぱ、私、（震えて）怖い

晴香 もうちよっとくつついて。それから

晴香、防寒着のファスナーを開ける

晴香 はい。食べて

愛美 いやだ。これってこの間私があげた義理チョコじゃないですか

晴香 つぶれちゃったね。それから、カイロ。まだしばらく温かいと思うし

愛美 うわ。温かい。でも、先輩はどうするんですか

晴香 私は大丈夫。愛美となら

愛美 私？

晴香 この際だから、言ってもいいかな。私、愛美のこと

愛美 あ！ 部長の声だ。晴香先輩、シエルター壊していいんですよ

晴香 え、あ、どうぞ

雪、崩れる

終

「水槽列車」

登場人物

奈津

車掌

終電間際の都会の駅プラットホーム

奈津 あれ、おかしいな。次は各駅停車の最終のはずなのに、このいかにも特別列車です、みたいな車両は

何？ ホーム間違えちゃったかな

車掌 ちよつと。お客さん

奈津 え、わたしですか。すみません、終電に乗らなくちゃいけないくて、急いでるので

車掌 まあまあ、お待ちなさい。そんなに忙しがっていると、人生、一度きりの出会いを逃しますよ

奈津 は？ いや、だって最終電車ですよ？

乗り損ねたら家に帰れないんです。失礼します

車掌 あなたの乗るつもりだった終電とやらにはもう間に合いませんよ

遠く車両ドアのしまる音。発車ベル。

奈津 うそお。やっぱりホーム間違えてたんだ。

やだ、どうしよう

車掌 ところで、あなた、運がいい。この人気沸騰、めったなことにはチケットが取れない水槽列車、たままキャンセルが出ましてね。いかがですか。

奈津 え、水槽列車？これが？

車掌 そんな言い方しなくても。最高級列車ですよ。

奈津(M) 水槽列車のことは知っている。窓がとても大きくて、まるで水槽のような列車。幻と呼ばれている。詳しいことは誰も知らないらしい。聞こえてくるのはうわさばかり。そんな幻の列車が今、目の前にある

奈津 ごめんなさい。あんまり電車で詳しくなくて。

けど、駅員さん？ どうしてわたしに？

車掌 私は駅員ではありません。この水槽列車の車掌です。いえね、せっかく席に空きができて、目の前にお客さんがいらっしやったのでお誘いしてみたわけなんです

奈津 確かに、わたししかない

車掌 そういうわけなんです

奈津 わたし今すごく疲れてて、早くうちについてシャワー浴びて、早く寝たい、とか思ってたんだけど。これってすごいラッキーですよ。テンションあがった。ぜひ乗りたいです

扉が閉まる。列車走り出す。

奈津（M） 想定外の出会いがあって、わたしはかの有名な水槽列車に乗っている。これって、列車に乗りながら目の前に魚が泳いでいたり、サンゴ礁が出現したりするのが楽しめるらしい。実際はどんな場所を走るのかなあ。それも秘密なのかな。

車掌 （車内アナウンス）このたびは、当列車をご利用いただきまして、まことにありがとうございます。

終点、海の楽園駅まで、わたくしが車掌を務めさせていただきます

奈津 あ、の、車掌さん

車掌 な、なんです

奈津 これって、どのくらいの時間で着くんですか。

車掌 えーと、終点海の楽園駅に着くのが夜明けくらい？ 朝日の海が見れますよ

奈津 （笑って）車掌さんなのに、くらい？ なんです。時刻表とかないんですか？

車掌 通常の移動手段としての電車などとは違います。いわばミステリーツアーみたいになっておりまして

奈津 ふーん。そういうもののなの。けっこうゆっくりリフレッシュできるかな

車掌 それはもちろん。どうぞご期待下さい

奈津 でも、水槽っていうけど、水槽なのは車両の外側でよう？ 窓の外がみんな水槽みたいってかんじ？
車掌 そのへんは、あとでのお楽しみ、としていただければ。ちよっとわたくし、業務がごさいますので、これにて失礼

奈津(M) うわさでは具体的なことって全然聞けていない。なんか竜宮城見物みたい、とか。本物の竜宮城なんて、誰も知らないのに

進んでいく列車

奈津(M) (周りを見回して)それにしても、みんな、ずい分静か。普通、こんなレアな旅に出たらわくわくが止まらないってかんじで、お連れさんとしやべり倒すでしょ。あれ、みんなひとりずつなんだ。へえ、意外。

車掌室のドアが開く

車掌 さあ、みなさま、お待たせいたしました。いよいよクライマックス、この列車が 水槽になる瞬間をお楽しみください

水が注がれる

奈津 うそ。ちょっと待って。水、こつち？

海の魚を窓の外に見るんだよね。え、やだ、足元に水。みんなどうして座ったままなの。濡れちゃうじゃない。ちょっとちよつと、どうして平気でいられるの？ ちよつと！ 車掌さん

車掌 なんですか。そんな子どもみたいに椅子の上に登ったりして

水の注がれる音、だんだん激しく

奈津 どういうこと。窓の外が海とかなって、水の中の風景を車内から楽しむっていう企画じゃないの？

うわあ、もう座席の上まで水。ちよつと、わたし聞いてないから。降ります。降ろして！

車掌 無理無理。いるんだよね。こういう空気読めないお客。この状況、無理でしょ、どう考えても

奈津 わたしたち、ここでおぼれて死ぬの？

車掌 そんなことありませんよ。魚になって気持ちよく泳いで生きていくことになるだけです

奈津 魚に、なる？

車掌 水槽列車とは、水槽になる列車ですからね。普通に考えたらそうなるでしょう？

奈津 そんなの普通じゃないから！

車掌 お客様は運命に導かれて、自らの必要によって、乗車して、魚になっていくんです

奈津 意味わからない

車掌 お客さん。そもそも、この列車に引き寄せられて、

あのホームに立っていたってことは、あなたは魚になる運命だったんですよ

奈津　なんで、わたしが

車掌　だから。普通の人にはこの列車は見えないんですよ。私が声をかけたら振り返りましたよね。乗る必要のない人には私の声は聞こえませんか

奈津　自分のせいってこと

車掌　あなた、人生に躓いているでしょう？

それから、水泳部出身、と

奈津　え。どうしてわたしのこと知っているの

車掌　私が水槽列車の車掌だからです

魚がはねる水音

奈津（M）　ほかの乗客が水に浸っていく。口をぽかんとあけて、首が後ろにがくんとのけぞる。乗客の口から、口から黒い塊が出てきて、車掌の手にした箱の中に吸い込まれていく

車掌　はい。人生いただき。軽く泳いでいきましょねっと

奈津子（M）　その人の身体はくるりと翻ってすいすいと

泳ぎ始める。魚になって、軽そうに楽しそうに泳いでいく。一瞬、こんな風になってもいいかも、と思えた。昔、高校生で水泳部員だった頃、今みたいに人生は重くなかった。軽やかに泳いでいた。魚みた

いに

車掌 さあ、次はきみの番だよ

奈津（M） 車掌がにたと笑って、箱の内側でわたしの視界をふさいだ

大きく魚がはねる

奈津 ふふふ

車掌 これで今日の仕事はおしまい

重く箱の蓋が閉じられる。心地よい水の音。

終

「ホワイトクリスマス」

登場人物

母 娘のハルカ（１７）を亡くしたばかり。

トナカイ 天からの使い

舞台には、母がいる。

うた。ホワイトクリスマスではない曲。ほんのりせつなく。

母（Ｍ） クリスマスイブ。もう十年も毎年ハルカと買いにきて来ていたクリスマスケーキ。今年は一人で買って帰る。それでも、去年までと同じあのケーキなら、あの子も天国からかえってくるかもしれない。うそ。お店の明かりがない。見たことがないシャッターが下りている。どうして？ クリスマスにケーキ屋が休みなんて。張り紙。『閉店のお知らせ』って。お店やめてしまったの。こんなことは想定してなかった。

ケーキを買って帰ることだけを考えていたのに、お店がないなんて。

急に寒さが身に染みてきた。あ……雪。今夜は積もるのかしら。早く帰るべき？ でも、ケーキ。どうしよう。でも、ここのお店のケーキがないならいっそなくてもいいのかもしれない。寒い。心まで凍りそうな気持ちになってきた。

トナカイ登場。

舞台には最初からいてもよい。

この段階で出てくるのもよい。

トナカイ　ぴゅーん。とつとつと。(母の存在を認識して)　メリークリスマス！

母　え、何。トナカイのコスプレの人？

トナカイ　いいえ！　トナカイです。

母　え？　(ちよつとおかしい人と思い、話題を変えて)　あ、えーと。ここのケーキ屋さん、閉店したみたいですよ。

トナカイ　ケーキ屋さん？　あ、大丈夫です。そういうの興味ないんで

母　じゃあ…あ、そうか。この商店街の裏の住宅街とかへお届け物？

トナカイ　正解！　お届け物っていうのはね。でも、お届け先は、あなたですよ。

母　私に？　何かの間違いでしょ。私はたまたま今ここにいただけで、この辺の住民ではないし。じゃ(たちさろうと)

トナカイ　ちよつと待って！　ユキカワハルカさんのお母さんですよ？

母　え。なんで娘の名前を？

トナカイ　だから、ユキカワハルカさんからのクリスマスプレゼントのお届けです。天国からのね。

母　…ていうか、おかしいでしょ。トナカイが？　天国から？　あなた寒くておかしくなったとか？　い

え。おかしくなったのは私かしら。寒すぎて。やっぱりうちに帰るわ。

トナカイ だめです。あなたにプレゼントをちゃんと届けて、幸せになってもらわないと私の評価がマイナスになってしまいます。

母 あのね、クリスマスにプレゼントを届けるのって、トナカイではなくて、サンタクロースという人物だ
と思うんですけど？

トナカイ ああ、あの人ね。実はちょっと忙しすぎて、腰、やっちゃって。

母 ……

トナカイ だから。このようにワンオペ。そりをひとりで走らせて、お届けもしているわけで。ほんと、た
まりませんね、人手不足。さ、手を出してください。はい、これ。

母 待って。この儀式は何？

トナカイ あれ。重さ、感じませんか？

母 重さ。

トナカイ ええ。今、ちゃんとあなたの手に乗せましたよ。プレゼント。

母 乗った気はしませんけど。

トナカイ 小さい子どもは大きな贈り物で喜ぶけど、大人になるにつれ、小さいものほどいい贈り物なんで
すって。

母 小さいとかではなくて、何もくない？

トナカイ はい。あなたは大人なので。本当に大切なものは質量のある物体ではないんだそうですよ。

母 そう。残念だけど、私には何も感じられない。

トナカイ　しょうがないなあ。では、説明します。ハルカさんからの贈り物。『お母さんへ。初めてこのお店でクリスマスケーキを買ってくれたときのこと、覚えてる？　雪が降って、滑って転んだわたしの手にぎって、ケーキ屋さんに連れて来てくれた、お母さんの手のぬくもり。ずっと大事にしてきたよ。だから、これからも、わたしはお母さんの手のぬくもりの中にいるから。メリークリスマス！』……とのことです。

母　うそ。それはハルカが5歳の時のクリスマス。でも十年以上も前よ。今のあの子は、私のこと、恨んでいるはず。

トナカイ　そのような情報は聞いていません

母　去年のクリスマスの日、あの子は私に夢を語った。雪の積もる寒い国で凍えている子どもたちを助ける仕事につきたいと。私は反対した。

『ハルカにはそんなことできないからやめなさい』

あの子の言い分に耳を貸さなかった。どうしてそんな仕事をしたいと思ったのか、私は知らないまま。けんか別れをした直後、ハルカは交通事故にあって夢の行き先ではなくて、天国に行ってしまったから。あの子には夢があったのに、私が奪ったの。だから恨んでいるに決まっている。

トナカイ　ハルカさんからの伝言には、その話は入っていません。そもそも、恨んでいたら、唯一の贈り物をする相手にあなたを選ぶと思います？

母　唯一、なの？

トナカイ　そうですよ。ハルカさんはあなたに贈り物をするを選んだんですよ。

母　ハルカが……

トナカイ ハルカさん、今どうしてるか気になりませんか。

母 今って言ったって、あの世に行ってしまったのだし。

トナカイ やだなあ。あの世だなんて言い方。天の国ですからね。ハルカさんは天使みたいな仕事についているんですよ。

母 天使？ ハルカが？

トナカイ そうそう。さっきのハルカさんが天国に来る直前のお話からすると、まさに夢、叶えたようなものではないですか。

まあ、寒くて凍えそうな国ってわけではなくて、暑くも寒くもない国、ですけど。そこで、子どもなのに天国に来てしまって寂しがっている子たちをなぐさめて、楽しくやっていけるようにお手伝いしてくれています。心が寒い子供たちを助ける仕事、まさにそんな天の職なんですよ。

母 天、職。

トナカイ そうそう(にっこり)

母 それなら、仕方ないかもしれないわね。天に昇ってしまったことはどうにもならないし。あの子が、私の知らない場所でも、夢を叶えたのだったら、私は口を出すことはないわ。

トナカイ ですよね。よかった。わかってもらえた。

母 あの子、明るく天使やってるのね

トナカイ もちろん

母 ねえ。そのカラのそりで天に帰っていくのよね。

トナカイ そうだよ。なんか積んでたらさ、降りてくるのはいいけど、登っていくのってけっこう大変なん

だよ。だから、留守とかされてるの、ほんと困るんだ。でも、今日はみんなうちに来てくれた。こんな雪の降る夜だから。みんなアットホームでホームパーティ。

母 お願ひしてもいいかな。

トナカイ え？ なに？ ぼくに？

母 そう。そうしたら、私はとても幸せな気持ちになれるし、そしたら更にポイントが入るのよね

トナカイ そうだけど。なに、重たいものは持っていないからね。天にはつれていけないよ。

母 失礼ね。わたしは重たくなんか。そういうことじゃなくて。あの子に伝えてほしいことがあるの。

トナカイ 伝言？

母 そうね。あの子の好きなうたを。

トナカイ いいよ。

母 あの子、好きだったの。一緒に歌うホワイトクリスマス。いつも、5歳の時のクリスマスに雪が降りだした話をしてた。私だって覚えてる。あの日の、ホワイトクリスマス。

うた。ホワイトクリスマス。

終